

前回までのあらすじ

古代種〈ステインガー〉を殲滅^{せんめつ}するため発動された〈ヒナミ総力戦〉は、想定外の状況へと推移した。一度は倒したそれは人間の女性の姿となり、自らを『サクヤヒメ』と名乗り、人間を滅ぼすと宣言。

猛威を振るうサクヤヒメによつて、作戦に参加した〈機獣少女〉だけでなく、同じ古代種であるアニスマでもが倒れ、謎の意識不明状態であったやみひめも彼女の手落ちてしまふ。

すでに満身創痍の一行は撤退を選択。だが、サクヤヒメが召喚したかつての仲間達を『終わらせてやる』ため、ライカは切り札である〈レイジ・システム〉を起動。単身で戦いを挑み、勝利したかに見えたが……。

一方、ツバキの相棒^{パートナー}である〈カグツチ〉を使い、〈機獣少女〉となつて戦うアヤカは、サクヤヒメと互角の戦いを繰り広げる。〈ステインガー〉の封印施設に組み込まれていた彼女は、人類初の〈機獣少女〉であり、〈カグツチ〉の本来の契約者でもあった。

サクヤヒメとの共存案は一蹴され、もはや戦うしか道は残されていない中、しかしアヤカは本来の力を出せないでいた。その理由はMBデバイスにあると考え、アヤカは〈カグツチ〉を本来の名前で呼んだ。

〈ヤミヒメ〉——と。

※登場人物紹介は[こちら](#)

ゾイカルやみひめ -結-

静まり返ったホテルの一室。

秋も終わりが近いため窓は閉め切られ、差し込む月の明かりだけが室内を照らす。今宵の月は紅い。それは奇しくも淫靡な雰囲気を漂わせ、この部屋の本来の用途へと、彼等を誘おうとしているかのように錯覚する。

此処は男女が性の営みを行うための場所——つまりはラブホテルである。

普通のホテル代わりに一人で入る者もいれば、最近は同性数人でパーティ会場として利用する場合もあるようだが、やはり本来の用途が目的で利用する者達がほとんどだろう。

それが男女の二人組であれば、傍から見れば『お楽しみ』としか思われたいはずだ。

「……………はあ——」

少女が、切なげに吐息を漏らす。

幅二メートルはありそうなキングサイズのベッドには高校生くらいの少年が仰向けで眠っており、少女は彼に馬乗りの姿勢で、その寝顔を見下ろしている。

そんなつもりはなかった。ただ純粹に彼を気遣い、楽な姿勢で眠らせてやりたかっただけのはずが、なぜ、こんな押し倒すようになかたちになっているのだろう。眠っている彼に馬乗りになり、息を荒くしては、まるで痴女ではないか。

「——」

そうだ。今なら彼を好きに出来る。仮に起きて抵抗されても、《機獣少女》の力を使えば屈服させる事は容易い。そんなのはレイプと変わらないと判ってはいるが、今は惑星規模の非常時で、彼女一人に構っている余裕などない。そもそも、犯罪は立証されなければ罪に問われないし、発覚しなければ事件ですらないのだ。今のうちに既成事実を作り、後で合意を得てしまえば、何の問題もない。順序の違いでしかない。彼が自分を拒むはずがない。

（だって、私はこんなにも兄さんを愛しているんだもの——）

同じくらい相手も自分を想ってくれているに違いない。

二人は兄妹なのだから——

「——兄さん……」

ようやく逢えた。

迎えに来てくれた。

それがとても嬉しい。

「ん……………」

身体が熱い。

無意識にシャツのボタンをすべて外し、ブラジャーのホックも外す。開けた胸元が外気

に触れ、火照りが冷めて心地良い。

彼が目を覚ましたら、今の自分を見てどう思うだろう。男の前で肌を晒す、はしたない女だと幻滅するだろうか。それとも、女性として成長した姿に、ドギマギしてくれるだろうか。

後者であってほしいと願う。

『妹』ではなく、『女』として見てほしい。

血の繋がりに目に見えない。家族であるという認識は、長い時間を家族として過ごすからこそ生まれる。共に過ごせなかったこの空白の数年間は、きつと男女として結ばれるための準備期間だったのだ。そう思えば、自分の境遇を嘆く必要もなくなる。

「はあ……はあ……」

胸が高鳴って苦しい。

彼の無防備な寝顔を眺めていると、堪らない気持ちが押し寄せてくる。

恐る恐る、彼の左手を両手で包むように握る。そのまま、祈りをささげる乙女のように、握った彼の左手を自分の胸元に抱き寄せる。気温のためか、彼の手はやや冷たく、熱を帯びた肌にちょうどいい。

「兄さん……」

彼の手を強く胸元に押し当てる。自分と彼を隔てる肌の存在が疎ましい。もつと近くに彼を感じたい。もつとひとつになりたい。

かろうじて残っていた理性が消え去り、原始的な衝動が本能を突き動かす。それはラブホテル
この場にもつとも相応しい、愛情表現という大義名分の下に行われる、男女の交わりへの欲求――

「……………カナコ？」

「あ……………」

他人のズボンのベルトを外すという慣れない行為に手間取っているうちに、目を覚ましていた彼――橘アサトと目が合った。

その瞬間、カナコ・T・シングウジは一瞬で理性を取り戻し、この状況をどう言い逃れするかだけを全力で考えた。理性など失ったまま事を終えてしまえなかった自分を恨みながら。

実を言えば、アサトが目覚めたのはもう少し前だった。何か腹の上に乗っている。薄目を開け、それがカナコである事も気付いていた。だが、状況がまるで理解出来なかったのだ。

古代種と呼ばれる巨大な機獣——〈ステインガー〉を殲滅するために発動された〈ヒナミ総力戦〉。流遠やみひめやツバキ・タカチホが決死の戦いを挑んでいる頃、アサトは〈ステインガー〉を封印していた施設の調査——これは消息不明となったフアフロウ姉妹とキリエ・ソウマの捜索も兼ねていた——に同行していた。得られた成果は、〈ステインガー〉の復活が人為的なものである確証と、惑星ゼヘナでも世界変化が起きていた事実の発覚、そして其処にいるはずのない少女——アヤカ・シュバイツァーの保護だった。封印施設を後にし、作戦が行われているヒナミ・シテイへと向かう最中、カナコがトレーラーに乗り込んだかと思えば、これまた脈絡なく彼を『兄さん』と呼び、強引に連れ出した。

アサトが覚えているのはここまでの。〈機獣少女〉の強化された身体能力による移動で意識を失い、気付けばホテルの一室——しかも明らかにラブホテル——で、目の前には胸元を開けて恍惚とした表情の少女が馬乗りになっていれば、寝ているふりをして様子を窺うのは極めて自然な事だろう。けして、あわよくば美味しい思いが出来るかもしれないなどと邪な考えはない。仮に痴女に夢を抱くような輩員であったとしても、妹かもしれない相手と一線を越えるような事はあつてはならない。これはあくまで倫理的な思考であり、意気地なしとかヘタレとかでは一切ない事は彼の名誉のために強調しておく。

カナコがベルトに手をかけた辺りで、さすがに不味いと思ひ、アサトは目を覚ましたばかりといった様子で彼女に声をかけたのだった。

「……………」
ほんのりと紅潮しているが、見慣れた無表情を浮かべたカナコは、無言で此方を見下ろしている。照明は点いておらず、月の明かりだけが室内を照らす。今宵の月は紅く、場所のせいもあり、無駄に雰囲気演出しているように感じる。怪しげな紅い光に照らされるカナコの姿は煽情的で美しい。開けたシャツから覗く二つの膨らみは、細身で物静かな彼女の印象からすれば意外なほど大きく、前屈みのため寄せられた谷間は豊満と言つて差し支えない。

(……………綺麗だ——)

まだ成長の余地を残した、未成熟であるからこそ、背德的とも呼べる危うい均衡の上に成り立つ至高の芸術品。大人でも子供でもない、少女特有の儂げな美しさ。それをカナコは体現していた。

「……………ち、違ふんです——」

「……え？」

「これはその、違くて……兄さんが寝苦しいんじゃないかと思い、楽にしてあげたくてです
ね」

「……………」

「——あ……」

互いの視線がアサトの股間に集中する。

彼の股間は、所謂、のつびきならない状態に変化していた。寝起きの単なる生理現象か、この特異な状況によるものかは判断のしようがないが。

「ちっ、違っんです！ 楽にっていうのはそういう意味じゃなくて、純粹にベルトを緩めた方が楽に眠れるだろうという意味であって、けてナニをナニしようなどというハレンチな意図はなく……っ!？」

「……あー、うん、判ったから。なんか、俺の方が居たたまれなくなる。それより、その……」

「……………」

「降りて、それから……前を隠してくれ」

カナコは軽いので馬乗りされる事自体は大した問題ではないのだが、シャツの前を開けた状態でこのアングルは非常に精神衛生上よろしくない。眼福ではあるが、口には出さない。相手は妹かもしれないのだから。

「……………」

ようやく自分の着衣の状態に気付いたらしく——むしろ気付かなかったのが不思議だ——ぱつと自分の身を抱くようにして、更にアサトから降り、ぺたんと両足をベッドに付けて、カナコは背を向けた。

「……………」

恥じらいに肩を震わせつつ、シャツの前のボタンを閉じていくカナコの背中を見つめる。すると、何かに気付いたように固まり、カナコは俯きがちに振り向き、アサトを指差した。長い黒髪で表情が見えないため、まるで怪談のワンシーンのようだが、彼女が差している物の正体に気付き、アサトもまた身を固くした。ブラジャーだった。

平静を装い、脇に落ちていた女性用下着を掴み、多少ぶつきらぼうに手渡す。

「……………」

「……………すみません——」

消え入りそうなカナコの声から、彼女の表情が羞恥に打ち震えている事は容易に想像がついたので、せめてもの優しさで目を逸らした。というより、どんな顔をしていいか判

らないのは彼も同じだった。

「……………」

「……………」

カナコが着衣の乱れを整え、改めてアサトと向き合う。キングサイズのベッドなので狭くはないが、それでも室内で二人きりの男女の距離としては近い。見慣れた無表情に戻っているように見えるが、この距離だと緊張しているのはすぐに判る。緊張は他者に伝染する。状況も相まって、アサトもまた緊張に近い落ち着かなさを感じていた。

何から訊くべきか。その選択を誤れば、取り返しつかない事態を招くような気がする。

〈ヒナミ総力戦〉はどうなったのか。

順当に考えれば、これだろう。だが、その選択肢はこの場では不正解な気がした。

「さつき、俺を『兄さん』って呼んだよな。トレーラーから連れ出す時も。なんでだ？」

ヒナミ・シティで戦いは続いているのかもしれない。だが、戦う力のない自分にはどうしようもない。なにより、まずは目の前の少女をなんとかしてやりたかった。

互いに、自分達が兄妹かもしれない事は認識している。だが、確証となるものがない。作戦中に何か思い出すきっかけでもあったのだろうか。

「……全部、思い出したんです。保護される以前の記憶、全部」

ぼつりぼつりとカナコが口を開く。彼女は五年前、記憶のない状態で、とある荒野で発見されたと聞いている。

「私の名前はたちばな橘 カナコ。アオキ小学校六年一組、出席番号十三番。六月六日生まれの

A型——」

「……………」

カナコがつらつらと述べるプロフィールは、アサトの妹と完全に一致していた。

「好きな色は黒。好きな動物は猫。好きな食べ物はグラタン——」

ほんの少し間を置き、カナコは続けた。

「好きな人……お兄ちゃん」

ほんのりと顔を上気させ、上目遣いで此方を窺うカナコ。色々とあざといが、すべてが妹と一致する。今の彼女からは想像もつかないが、行方不明になるまではずっとアサトを『お兄ちゃん』と呼んでいた。そして、年頃のためか、その呼び方に照れくささを感じていたらしく、六年生になると今のように少し恥ずかしそうに呼ぶようになった。

確信した。

三年前に行方不明になった妹が目の前にいる――

「……………本当に、カナコなんだな――」

「……………はい――」

泣き笑いにも似た表情を一瞬浮かべ、直後に自分の胸に飛び込んできた妹を受け止める。溢れ出る感情を堰き止めるための理性は決壊したらしく、カナコは幼子のように泣きじゃくった。もともと、それは兄の方も大差なく、アサトは右手でカナコの頭を撫でつつ、空いている手で自分の涙を拭いていた。

「……………ごめんな、見つけてやれなくて」

「うっ……………うん……………うわあああああああああ――っ」

身体中の水分がすべて出てしまうのではないかと不安になる勢いで泣き続けるカナコを、アサトはぎゅっと抱き締めた。



アサトとカナコが兄妹の再会を果たしていた頃、ヒナミ・シテイではサクヤヒメとアヤカ・シュバイツァーの戦いに決着が付こうとしていた。

「無様よの」

両腕を拘束され、身動きの取れないアヤカに向け、和装の麗人は冷たく言い放った。

「……………ええ、そうね」

サクヤヒメの和服の両袖から伸びる、蠅のそれを思わせる機械的な鉤によって壁に縫い付けられている少女は、自嘲気味に肯定した。身に纏った修道女のようなワンピースとベールはボロボロで、肌があちこちで露出しており、十五歳という、まだ肉付きの薄い肢体が、その光景をより倒錯的なものになっている。

「不思議じゃの。妾は今、この光景になんとも言えぬ昂りを感じておる……………己には判るか？」

「興奮じゃない？ 性的な意味での」

「己の、その状態にか？ 今は同性である妾が？ ……ふむ、人間というのは実に不可解じゃの」

「普通よ。こんな美少女が煽情的な格好で拘束されてるんだもの。立場が逆なら、私は興奮で絶頂してる自信があるわ」

力なく、それでも余裕を残した表情で、アヤカは怪訝そうなサクヤヒメに持論を説いた。

「ちなみに、この手のジャンルを『リヨナ』と呼ぶわ」

「呆れを越して感心すら覚えるわ。何かこの状況をひっくり返す切り札でも残しておるかのようじゃ」

「かもね。身体検査でもしてみれば？ 今なら無抵抗な美少女を好き放題よ？ ……くっ、殺せ」

わざとらしく恥じらいの表情を浮かべ睨み付けるが、当然、サクヤヒメに意図が通じるはずもない。

「ちなみに、今のは『くっころ』って言うって——」

「もうよい。どうせ時間稼ぎであろう？ それも、当てがある訳でもない、奇跡が起こる事を期待した他力本願な悪足掻きじゃ」

「……………」

「起こりはせぬよ、都合の良い奇跡などな」

憐れむような表情を浮かべるサクヤヒメ。

「同意するわ。だって——」

アヤカの衣装——機力で編まれたMBジャケットの表面が青白く輝く。

「奇跡ってというのは起こしてこそ価値があるものだもの」

爆轟。

一瞬で炎が燃え上がり、熱と衝撃波が轟音を伴って広がった。アヤカの背後は壁だったため、それらは限定された方角に広がり、結果、サクヤヒメの方に殺到した。

死闘が繰り広げられた無人の街が炎に包まれる。燃え上がった炎は、すぐに煙に巻かれ見えなくなり、紅い月の光だけが、その光景を照らし続けていた。

第三十六話

制御できないココロ

ゼーナ暦二〇一六年十月二十日。

《ヒナミ総力戦》に関わった人間にとって、恐らくは生涯で最も長い夜が明けた。

サクヤヒメによって深手を負ったアニスを含む満身創痕の《機獣少女》達は、ロゼットの乗るトレーラーと合流し、ヒナミ・シティからオオミヤ・シティへの帰還を果たした。

誰もが疲れ果て、また敗走という結果に、当然だが車内は重たい空気で満たされていたため、報告を含めた諸々もろもろは明日——つまりは日付変わって今日の午後に行く運びとなり、昨夜は各自それぞれの家へと帰っていった。

昨夜と言っても、それぞれが眠りに就いたのはほぼ夜明け頃。疲労も相まって、ツバキ・タカチホが起床したのは正午を過ぎた時間帯で、報告会の約一時間前だった。身支度みじたくや食事、移動を考えるとギリギリだろう。

そうして到着したのがMBドライバー・アソシエーション東方大陸支部。まったく定着していないが、『MBドライバー』とは《機獣少女》の正式名称で、此処ここはその管理や育成などを担う組織の施設である。いち《機獣少女》が訪れる機会めったは滅多にないが、ツバキは地球へと転移した件で、約二週間ほど前に来たばかりだったりする。最初に通された部屋で《ヒナミ総力戦》に参加したメンバーのうち、オオミヤ・シティに帰還し、入院の必要のない者と、ロゼットが揃った。

ロゼット・コダールはL.C.ファクトリーリユウテイの最高責任者で、《機獣少女》の装備に関連した技術者ではあるが、本来、今回の《ヒナミ総力戦》のような作戦立案などに関わる立場ではない。それだけ彼女の襲名した『ロゼット・コダール』という名前に力がある事、そして、それが罷り通まかってしまうくらい異常な状況なのだと、こうして冷静になると気付く。

数時間前と比べ、ロゼットは明らかに疲弊していた。寝ていないのだろう。それも当然だ。あれから負傷者を送る病院を手配し、これから行う報告会の準備もしていれば、一時間でも仮眠が取れていればいい方だ。彼女の補佐をしていたであろうアニスの姿も見えないため、古代種——人知を超えた存在とはいえず、やはり一瞬で怪我けがを治せたりはしないのだろう。

集まったのは地球から来たクラウ・P・ブラン。《竜帝》リユウテイの二つ名を持つルイゼ・ルンシュテッド。《FA::Gエンタテインメント》所属のバナラ・イカルガ。そしてツバキの計四名。直接作戦に参加した十人中、半分以下だ。残りは入院、及び行方不明ゆくえ。死亡が確認されていないのが、まだ救いかもしれない。

行方不明と言えば、修道服の少女——アヤカ・シュバイツァーも同じだ。ロゼットによると、彼女は《ステインガー》の封印施設で発見され、アニスによって作戦中のヒナミ・

シティまで運ばれたらしい。そこでツバキはアヤカに〈カグツチ〉を渡し、直に見てはいないが〈機獣少女〉としてサクヤヒメと戦った。

これは報告会が始まってから知った事だが、アヤカは人類初のMBドライバー——〈始まりの機獣少女〉と呼ばれる存在であり、〈カグツチ〉の前の契約者でもあった。彼女は〈ステインガー〉と戦い、しかし殲滅する事は出来ず、自ら封印施設の一部となって共に永眠りに就いた。だがその事実は世界改変によつて誰の記憶にも、記録にすら残っていない。

街頭でそんな事を高らかに語っている者がいれば、妄想狂の戯言と誰も耳を貸さないだろう。相手が信用の置ける人間だったとしても、まずは休養を勧めよう。だが、サクヤヒメとアニスという古代種の存在と、アヤカの〈機獣少女〉としての能力、そしてツバキに至っては地球での世界改変の前例を知っており、別の星に転移するという超常現象も体験している。ロゼットと作戦参加者にとっては、絵空事と一笑に付す事は出来なかった。

もともと、この報告会の目的は別にあった。報告を受ける側——主に中央政府の役人にとっては、サクヤヒメもアヤカも、世界改変すらどうでもよかったのだ。

封印施設での出来事を含めた報告が終わると、中央政府側から提出された映像が流れた。かなりの高高度から、ズーム機能を駆使して撮られたと思いきそれは、非常に画質は荒いが、ヒナミ・シティの戦闘を上空から記録したものだ。十中八九、飛行型〈機獣少女〉によるものだろう。しかもそれはツバキ達が撤退後のものらしく、修道女と和装の女性——アヤカとサクヤヒメらしき二名が映っていた。音声はなく、高高度からの俯瞰の映像だが、それでも戦いの激しさは十分に伝わってくる。やがてアヤカが拘束され、決着が付くかと思われた瞬間に大規模な爆発。直後に画面が乱れ、黒一色になり、映像は終了した。

怒りを買う事を恐れているかのように〈ステインガー〉へ積極的な対応をせず、〈ヒナミ総力戦〉においても実質『黙認』でしかなかった中央政府が、作戦の様子を文字通り、高みの見物していた事はまだいい。問題はこの後だ。

〈ヒナミ総力戦〉は中央政府の主導で発動した。

サクヤヒメとアヤカ・シユバイツァーに関する一切の他言無用。

以上が中央政府側から提示された。

事情は理解出来る。秩序を維持するための、体裁や情報統制は必要だろう。これによってツバキ達に何か実害がある訳ではないし、結局、〈ステインガー〉殲滅を果たしたのは自分達ではない。むしろ、これに乗れば自分達が世界を救った英雄になれる。この場にいる誰もが幸せになれる夢の案だ。

納得出来るかはさておき、理解は出来る。その上でツバキはこう思った。
人間はこんなにも厚顔無恥になれるのかと。

同時に、ひどく危機感を覚えた。中央政府側は、あの映像でサクヤヒメ——彼等にとつては（ステインガー）のままなのだろうが——を殲滅出来たと思ひ込んでいる。確かにあの爆発で無事な生物などいないと思える。だが、あれは我々の常識で計っている存在ではないのだ。それを直接対峙していない者に理解しろというのは不可能だし、人間は信じたいようにしか物事を信じない。現地調査すら出来ない状況だが、すでに彼等にとつて（ステインガー）の殲滅完了は決定事項なのだろう。

事実そうだととして、本当にそれでいいのか？

「……………」

報告会という名の茶番を遠くに聞きながら、ツバキは自分の選択に今更ながら疑問を覚えていた。（カグツチ）をアヤカに渡すべきではなかったのではないか？ その場合、ジリ貧で負けは確実。こうして生きて帰る事は出来なかったかもしれない。

（けど、それでも——）

どれだけ全力で臨み、最善を尽くしたつもりでも、終わってみれば『こうすればよかったのでは？』と後悔が無限に浮かぶ。詮無い事だと判ってはいても。



すでに正午を過ぎた頃、窓から差し込む午後の陽射しに、橘アサトは顔を顰める。ただでさえ低血圧なのに加え、眩しいのも苦手なのだ。照明が点かないためカーテンを閉めなかつたのが災いした。

「……………」

カーテンを閉めようとベッドから身を起し、右腕に重さを感じた。視線を落とすと、見目麗しい少女がすぐ隣で、自分の腕に縋るようにして眠っていた。

カナコだ。

三年前に地球で行方不明となり、この惑星ゼヘナで再会したアサトの妹。

昨夜は結局、泣きじゃくるカナコを抱きしめ、そのまま眠ってしまったのだ。

実際に利用した事こそないが、部屋の様子から明らかに此処はラブホテルだ。とはいえ、相手は実の妹なのだから、年頃の男女が一緒に寝ようと何の問題もない。まあ、兄妹だからこそ問題という見方もあるかもしれないが、そこには気付かないふりをする。ただ宿泊するだけなら一般的なホテルと何も変わらない。

「……カナコ、起きてくれ」

やや緊張気味に声をかける。実の妹とはいえ、離れていた三年の空白ブランクは大きい。しかもカナコが転移したのは今から五年前のゼーナであるため、現在の彼女は十七歳の女子高生なのだ。更に言えば、出会って数日間は赤の他人として接していた。昨夜は勢いで抱き締めてしまったが、妹だと判った途端とたん、馴れ馴れしく接していいものだろうか。

「……んう、お兄ちゃん——」

返事というより寝言だろう。目を覚ましたという様子ではない。ぎゅつと力を込め、縫すがりつくアサトの右腕を上半身すべてで包もうとするカナコ。肘ひじの辺りが弾力のある柔らかい何かに挟まれてる気がする。

「………あ。おはようございます、兄さん」

カナコが目を覚ました。兄と違い寝起きは良い方なのか、同じベッドで朝——もう昼過ぎだが——を迎えても、動揺している様子はない。しかも昨夜から自然に『兄さん』と呼んでいる。五年の空白など、彼女には関係ないのだろうか。

「ああ、おはよう……」

「どうかしました？」

やや気まずそうなアサトの様子を察したのか、カナコが訊ねる。

「えっと、とりあえず腕をだな……当たってるんで」

何がかは言わず、やんわりと妹の拘束から逃れようとする。

しかし——

「……当たっているんです。どうですか？」

と、思いがけない問いかけが返ってきた。恥ずかしくはあるのか、わずかに頬ほおを赤く染め、心なしか不安そうな表情でカナコは此方こちらを見ている。昨日から薄々うすうす感じてはいたが、彼女が自分に向けている感情は兄妹のそれとは違う気がする。

「——っ!？」

弾はじかれたようにカナコがアサトの腕を離し、シーツを頭まで被かぶって顔を隠した。

「………すみません、忘れてください。きつと寝惚あけていたんだと思います。嗚呼あもう、何やってるんだらう死にたい——」

ぼそぼそと呟つぶやくような声音こわねで、後半はほぼ聞き取れなかったが、どうやらそういう事だったらしい。忘れていた記憶を取り戻して、情緒不安定になってしまっているのかもしれない。

「……カナコ」

ビクツとシートを被ったままのカナコが身体を震わせた。

「話せる範囲でいい。何があつたんだ？」

「……………」

〈ヒナミ総力戦〉はギリギリの作戦だった。必要最低限の戦力が集められたからこそ実行された。カナコが一人あの場に現れたのが敵前逃亡だったとしても、責めるつもりはない。その権利があるとすれば、同じ作戦参加者だけだろう。

「言いたくはない。ただ、これからどうするかは決めないと」

この明らかにラブホテルと思しき施設は何処にあるのか。照明が点かず、まるで人の気配が感じられないという事は、〈ステインガー〉に侵攻された街の一つかもしれない。適当にホテルを選んだら、偶々ラブホテルだったのだろう。とりあえずそう思っておこう。

「……見てください」

不意にカナコが言った。内容のため一瞬ドキツとしたが、シートから顔を出した彼女は服を着たままで、内心ほっとした。昨夜から危うい発言と行動が多いため、妙に意識してしまふ。

「——〈拘束〉」

おもむろに発したカナコの一言により、一瞬で彼女の衣装が私服から変化した。黒の袴に白の上衣。〈機獣少女〉の戦装束、MBジャケットである。思えば、ゼヘナで最初に見たのがこの姿だった。

ただ違うのは、彼女の表情を隠す黒い面バイザーの存在だけ。トレーラーの天井を破壊して、アサトの前に現れた時にも付けていた。

「この面バイザー、外せないんです……」

サンガラスのような半透明の素材なため、この距離なら奥の表情を窺うかがい知る事は出来る。悲嘆ひたん——というより、諦念ていねんに近いだろうか。当然の報いだと受け入れているような。

「……もう一度訊く。何があつた？」

アサトの静かな問いかけに、カナコは膝を抱え俯うつむきながら、語った。

〈ヒナミ総力戦〉における役割分担において、カナコ達『露払い』担当は充分に役割を果たした。現場は見えていないが、ツバキとやみひめは〈ステインガー〉を殲滅せんめつした。

しかし予想外の事は起こるもので、ペアを組んでいたカナコとアイナ・ボーグマンの前に、消息を絶っていた〈機獣少女〉——キリエ・ソウマが現れた。常軌を逸した言動と

戦闘力で暴走する彼女だったが、それはある種の前哨戦だった。

サクヤヒメ。

突然、姿を現し、自らそう名乗った和装の麗人は〈ステインガー〉が人の姿を採ったものらしく、そう信じざるを得ないだけの特徴と強さを一同に示した。彼女は姿を見せるなりキリエの体内にあったMBコアらしき物体を文字通り『引き抜き』飲み込むと、キリエの傷を何事もなかったように癒して見せた。その際、キリエの顔には表情を覆い隠す黒い面があり、それは彼女と同じようにサクヤヒメに使役されていた——この表現が正しいかはともかく——槌矛使いの〈機獣少女〉であるモカの顔にも装着されているのを見た。

「あのデカイ蠍が人間の女性に、ねえ……」

「私も姿が変わるのを直接見た訳ではないので、アニスの例がなければ受け入れがたかったかもしれませんが」

「封印施設で少しだけど、俺はアニスの力を見た。〈ステインガー〉——今はサクヤヒメだったか……古代種ってのは、とんでもないな」

アサト曰く、アニスは奥に進むため、不可思議な力で施設の壁を綺麗に破壊して見せたらしい。

「そうでしたか。しかし、アニスは我々に対して友好的です」

「そうだな。少なくともロゼットと仲良くしてる間は、敵になる事はないだろう」

アニスが友好的なのはロゼットの存在ありきという意味だろう。そういう雰囲気は確かにある。彼がそういう意図で発言したのも理解している。だが——

「……ロゼットと仲良く？ 兄さん、それはあくまで知人・友人として友好的な関係という意味合いですよね？」

湧き上がるこの感情は何だろう。止めどなく溢れてくる黒いもやもやとしたものに気が狂いそうになる。

「それとも兄さんは綺麗で優しくてスタイルも良くて才媛で権力まである女がいいんですか？ 年上ですか？ 包容力ですか？ お金ですか？ そんなものでいいなら私がすべて

——

「カナコ、怖い怖い……」

「……………」

気付けば、アサトの顔がすぐ目の前にあった。というより、無意識に彼ににじり寄り寄っていたようだ。

「お、落ち着いたか……？」

「……………はい、すみません」

我に返って距離を取る。

確実に引かれた。どんな重い女だ。あんなのホラーもいいところだ。

「……………信じてもらえないかもしれませんが、多分、この面バイザーのせいなんです」

正確には違う。だが、カナコの精神に影響を与えている原因が物質化して現れているのが、この面バイザーであるのは間違いない。MBジャケットを展開していない時に感じる異物感のようなものを、この面バイザーから感じるのだ。

「これのせいで、理性が働かなくなつて、欲望に歯止めが利かなくなつたり、今みたいに感情が制御出来なくなるんです……………」

昨夜の事もそうだ。アサトに対する想いで、暴走しかけた。それを抑えられたのは、痴女同然の行為をして、彼に嫌われる方が怖かつたからだ。持ち前のネガティブ思考がプラスに働きストッパーとなり、正気を取り戻せた。

「……………その面バイザーは？」

「……………サクヤヒメとの契約の証です」

「契約？」

「はい。記憶を取り戻してやる代わりに、この面バイザーを受け入れる——と」

『命令に従え』とかじゃないのか？」

「恐らく同じ事だと思えます。ですが、私は精神支配のようなものは受けていません。効かなかつたのかもしれませんが」

客観的な印象としては、キリエとモカでもだいぶ差があるように見えた。キリエは判りやすく強い力を与えられ、それに溺おぼれていた。モカは淡々たんたんと与えられた命令を機械的に実行しているように見えた。二人がどうなつたか見届けずに戦場を離れたため、その後どうなつたかは判らないが。

「私っ、ちゃんと抑えますから！ 兄さんが止めてくれれば、ちゃんと止まりますから！ だから……………嫌わなくてください、見捨てないでください……………お願いします——」

自分の言葉に悲しくなる。アサトに嫌われたらと思うと、恐怖で涙が零こぼれそうになる。ネガティブ思考が加速する。情緒不安定などという生易しいものではない。

（心が制御出来なくなるのが、こんなにも苦しいなんて——）

人間は無意識に理性で本能を制御する。欲望を抑え、心で感じたままを素直に表現はしない。

気に入らない相手は死ねばいいと思うが、実行はしない。他人の容姿を不細工だと感じても、態度には出さない。

理性が働くからだ。

理性があるから人間なのだ。

本能のまま、欲望のまま行動するのは、もはや人間ではない。

(人間だから、こんなに苦しいの？ 人間じゃなくなればいいの……?)

理性など捨て、人間でなくなれば法も関係ない。そうすればアサトと結ばれる事も――

いや、そんな範疇に留まる必要すらなくなる。人間は嘘をつく。人間は裏切る。ならばい

っそ――

「――?!」

霧散しかけていた意識が、ぎゅっと包まれたイメージ。それが段々と物理的な感触に変

わっていく。

(……私、包まれてる?)

違う。抱きしめられているのだ。

(……誰に?)

知っている。もう忘れない。

(忘れたくない……?)

拳こぶしに鈍い痛みが走る。痛いという事は、全身に張り巡らされた不可視の防護膜の限界

を超えたという事。同様の痛みが額ひたいの付近にもある。これはつまり、自分の拳で自分の

顔面を強打したという事か。

「……………痛い――」

この状態の元凶である面バイザーを破壊しようとした結果だ。

「生きてる証拠だ」

すぐ隣となりから聞こえる呆れた声あき。ただど優しい、大好きな人の声。密着しすぎて顔が見

えないが、今はその方がいいかもしれない。きっと見せられない顔をしてしまっているか

ら。

「……………」

状態を確かめると、面バイザーは健在。やはり物理的な手段でどうこう出来る代物しろものではない

らしい。

それよりも今は――

「……兄さん」

「ん?」

「兄さんにこうしてもらえるなら、なんとかやっていけそうな気持ちになってきました」

「こんな事でいいなら、いくらでもしてやめ」

情緒不安定になる度、こたひうして抱き締めてもらえるなら、それも悪くない気がする。
そんな不純な事を考えてしまうのも、すべて面ハイサーのせいには違いない。

「……兄さん」

「ん？」

「好き」

「……ああ」

「大好き」

「……………知ってるよ」

これからどうなるのかは判らない。

だから、せめて今だけは……。

へっへ

あとがき

どうも、流遠亜沙です。

『ゾイヤミ』第三十六話をお届け致します。

……なんとか一ヶ月で続きを公開出来ました。

とはいえ、完全に突貫かつ、あまり理性的な内容ではありません。ひたすら思うまま書いて、最低限、小説として成立させたつもりですが如何でしょう。

話はほぼ展開していませんが、ようやく〈ヒナミ総力戦〉が終わりました。また描写していない場面もあるので、事後処理含め、もうちょっと続きますが、これで次に行けます。いよいよ最後です。最後まで書くので見捨てずお付き合いください。

よきところで謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。『ゾイドワイルド』は楽しんでいますか？二年目に突入です。新展開です。ビーストライガーとキャノンブル、超カッター！

月一で更新すれば、あと五回。詰め込めば年内に完結出来るような気がしないでもないですが、今回二十ページしか書いてないので、恐らく無理でしょう。せつかく『ゾイド』が復活して盛り上がりを見せているので、『狂襲姫』を書きたいし、そのための『ゾイヤミ』だったはずが……まさに本末転倒！

そして現在、掲載日の夜九時……!!

2019/7/30 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXX 第3部』小説ページに戻る